

映画

講評 社城 毅

映画コースでは実習の授業で課題作品が制作される。その一部を紹介する。

〔1年次作品〕

「ビューな気持ち」原案・竹内哲也 脚本・浦英之 監督・大橋勇気 撮影・中江勇斗
うぶな恋心を抱く男子高校生の、エロ本とセックスと揺れる心描く。
「ハイタッチ」原案・古田裕次郎 脚本・石黒亮太他 監督・上野真虎 撮影・青山十詩子
コンビ別れの危機を乗り越え、M-1を目指す若き漫才コンビの物語。

〔2年次作品〕

「トワイライト」脚本・辻良子 監督・矢内佑貴 撮影／編集・宮川幸大
「natural hair」製作・宮崎恵 脚本／監督・武田文恵 撮影・岡翔太
「APPLE WARS」製作・澤一成 脚本・上田浩子 監督・撮影・滝澤優
辻良子と上田浩子の脚本が良い。演出は矢内佑貴、撮影は滝澤優と宮川幸大が光る。

〔3年次作品〕

「cick」製作・米田伸夫 脚本・種野佳奈子 監督・井上圭介 撮影・宝智陽志朗
「経理マン」脚本・吉野主／武田俊介 監督・武田俊介 撮影・堅佑佑介
好人物が多くチームワークは良い。

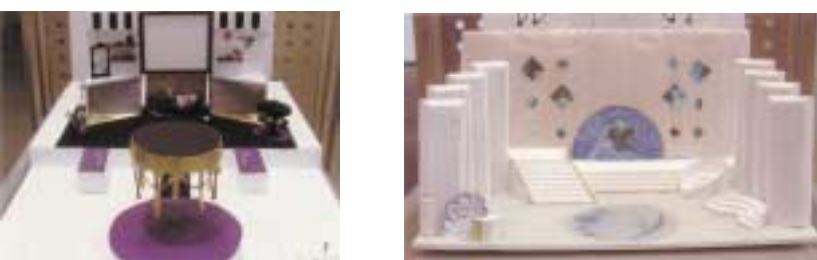
〔卒業作品〕

「ロボットとセミ」(12分) 監督・安部勝洋 ミニチュアとCG合成のアニメ。一級品。
「クローバー」(30分) 監督・竹本和志 SFドラマ。力不足。
「愚かモノ」(15分) 監督・米田龍也 美術品強盗を企む三人の男のドラマ。
「ななしのくらし」(30分) 監督・田中卓／吉田愛 野良猫ドキュメンタリー
「Tengu」(10分) 監督・小原光太郎 クラシックとダンスショー。
「consequence」(125分) 監督・小田千祐 長編サスペンスアクション。力作。
「Birthday Eve」(70分) 監督・大野えり子 理由なき殺人を描く長編ドラマ。
「Re+」(4分) 監督・加藤光介 CG作品。
「理想の朝」(40分) 監督・藤岡佳司 ホームレスを追ったドキュメンタリー。
「handmade feather」(7分) 監督・千葉善貴 インディーズムービーフェスティバル入賞者の短編作品。
「送球馬鹿」(45分) 監督・新美高志 高校のハンドボール部を追ったドキュメンタリー。
「ちょっと」(105分) 監督・前田亮 題名とは裏腹にただやたらに意味なく長い作品。
「小城義久短編集」(40分) 監督・小城義久 1回生から4回生までの小城作品集。
「おかわり」(30分) 監督・桑原奈緒子 沖繩に長期口ケ。ドキュメンタリー作品。
「Book」(20分) 監督・梅原真 帆に願いをこめる男の物語。
「KEEP MERRY COMPANY」(87分) 監督・嶋田史郎 劇場公開映画監督に一歩近い実力者・嶋田史郎の連者な映画作品。今期の卒業作品優秀ドラマ作品。

舞台芸術



金賞 4年 上田康子・山野あゆみ・境井祐子



金賞 3年 渡邊陽子

金賞 2年 岡田美咲

講評 上海 太郎

金賞 4年 上田 康子／山野 あゆみ／境井 祐子
卒業制作公演「アーバンクロー」～呼吸もできない～
真夏、空調のきかない密室、便所の臭い、グロ、少女虐待、トラウマ、刑事どうしの反目…と連なる息苦しくもネガティブなイメージを劇的に昇華させて、と言えは誉め過ぎだが、丹念な演出で後半すっきりとみせた。

講評 宮井 市太郎

金賞 3年 渡邊 陽子 「Starring Field」
音楽エンターテインメントの企画の作成と企画を展開する課題作品である。音楽ライブとファッションショーを企画し、その会場をデザインする課題作品である。音楽ライブとファッションブランドとのコラボレーションを軸にして展開を考えており、それぞれのアーティストが衣装を付けてライブを行うと云うものである。いわゆる一般的なファッションショーとは異なるが、この斬新な企画は観客を十分満足させるものとなるであろう。

金賞 2年 岡田美咲 「LIVE SHOWWINDOW」
ファッションショーを企画し、その会場をデザインする課題作品である。音楽ライブとファッションブランドとのコラボレーションを軸にして展開を考えており、それぞれのアーティストが衣装を付けてライブを行うと云うものである。いわゆる一般的なファッションショーとは異なるが、この斬新な企画は観客を十分満足させるものとなるであろう。

放送



透析患者の伊丹威さんと制作者の美村美由紀

生きるということ～透析を歩む人生～
制作者 美村美由紀／谷川絵理 (4回生)

講評 奥田 一重

三十分のドキュメンタリー番組ですが、時間の長さを感じずに終わりまで見ることができました。その理由を考えてみます。
一つは、ねらいがはっきりしていて番組から制作者のメッセージが伝わってくることです。同じ透析患者を肉親にもち、本人のたいへんさ、回りの家族の苦労を体験して、なんとか患者たちの救済を社会に訴えたいという気持ちがひしひしと伝わってきました。
二つ目は、そうした制作者の気持ちに共感し、共に制作にたずさわったもう一人の協力者の存在です。肉親を患者にもち、ともしば主観的に対象にのめり込んでしまふときに、客観的に患者さんに接し取材して行くことができたと思います。そのために説得力が増しました。
三つ目は、地味な透析患者さんの日常や活動を、象徴的な一人の患者を探しだして、あたたかさや熱意を持って追跡したことです。番組の節々に制作者のやさしさ、いたわりが感じました。
そうした結果があつてこの番組は、患者さんにも好評で、集会の時に上映したいという希望があると聞いています。
なお、本学は人工透析患者の生活の質の向上に取り組み、本学の池田正男理事長らが中心になって27年前に(財)大阪腎臓バンクを設立した。池田理事長が同バンクの副会長、本学の園田孝夫教授が理事長を務めている。また、同バンクのキャンペーンポスターは毎年、本学の学生が制作している。

芸術情報



卒業制作展賞 河田影子 金賞 3年 園増真衣 金賞 2年 杉田帆 金賞 1年 川野晋太郎 田中達也

講評 村上 佳明

卒業制作展賞 4年 河田 影子 「球から球」 3DCGアニメーション
「球」で始まり「球」で終わるというループ形式の短編動画を3次元CGで制作した作品である。ある形状から滑らかに変化させる立体的なモーフィングをメインの手法として用いた。植物、身近な器具、動物、宇宙空間など様々な事物が「循環の輪」の中で表現されている。技法上、頂点数やその並び方など厳しい制約があるが、作品ではテーマとテクニクがとてもうまく融合しており、動きも滑らかでこれを感じさせない。シンプルであるが良くとまった作品となった。

講評 岡本 正昭

金賞 3年 園増 真衣 「ニャン年ニャン組 だろぼう猫先生」 Web作品
本作品は、最近の世相を反映したネットワーク犯罪や情報セキュリティにまつわるトラブルに、社会経験の少ない若者がどのように対処すべきかという、かなり重たい問題に意欲的に取り組んでいて、話題性のある内容になっている。しかし、主人公には反面教師として「だろぼう猫」というユーモラスなキャラクターを使い、テーマの取り上げ方も猫にまつわる「ことわざ」を引用して、誰でも興味深くインターネットの賢い使い方を理解出来るように工夫が凝らされている。高校の「情報科」教育実習に向けた教材として開発されていて、「情報」は難しいと思われている高校生に、ビジュアルで分かりやすく芸大ならではの楽しい授業を展開していきたいという、作者の前向きな姿勢が好感もてる。本作品をきっかけに、芸術情報が世の中のニーズに的確にこたえられる存在感のある芸術領域に成長することを願う。

講評 村上 佳明

金賞 2年 金賞 杉田 帆 「Flower」 3DCGMムービー作品
「はじめにもネバーギブアップ」をテーマにした3DCGMムービー。シンプルな形のキャラクターとトゥーン表現がマッチしており、このストーリーに効果的である。またアニメーションや場面展開の巧みさが完成度を高めた。フル3DCGとしてはかなりの、長さの作品でのその努力と熱意を大いに評価したい。今後はカメラ割りの工夫や質感表現などの探求とともに、より独自の着想、作品コアの発見を望みたい。

講評 田中 常久

金賞 1年 川野 晋太郎・田中 達也 題名「兆弾戦機 リバーサー」
芸術情報学科は共同作業により質の高い、個人レベルでは対応できないような作業量と専門性の深化の実現に特性の一旦が現れると考えます。今回はプログラム言語に興味を持ち、成果を求める者とゲームの構造を分析することにより企画内容、表現方法の可能性を追求する二人の共同作品です。
テーマは定番ゲームのブロック崩しを元に、シューティングゲームの要素を取り入れ、キャラクターも工夫し、ブロック崩しの構造を解明しながら独自の再現作業を行うことで、独自性を高めた力作です。
プログラムソフトはyaneuraGameScript2000(一般的にはYGS2k)を使用し、プログラムになれる事を優先し、ドット絵、アニメーション等まだまだ不慣れな時期に完成した事の実験が有意義であったと制作者は感想を持ちました。今後はエンターテインメント性の高く、インタラクティブな特性を兼ね備えたゲーム機能を活かし、様々な分野への展開、可能性を研究し新たなジャンルを開いて欲しいと思います。

公開講座〈茶道の心は世界平和へ〉・造形展優秀作品

本学教授の千玄室・ 茶道裏千家15世が 公開講座

～「茶道の心は世界平和へ」～

宝塚造形芸術大学の東京新宿キャンパスと大阪梅田キャンパスで5月26、28の両日、本学大学院教授、千玄室先生の公開講座があり、いずれも定員を上回る超満員の盛況でした。千先生は茶道裏千家15世で、文化勲章、フランスレジオン・ドヌール勲章オフィシエ等を受賞され、現在、日本の国連親善大使としても活躍されています。

お茶こそ小さな宇宙 —「みんな一緒だよ」

先生は「茶道の心は世界平和へ」と題して、「お母様から教わった感謝の心、おたがいが感謝の心を持つことで、和の心が生まれる、日本は聖徳太子のむかしから和を尊ぶ国で、和、平和を一番のモットーにしている、お茶をたてる

とき、相手の幸せをねがおう、その心はお茶をたてるあなたにも戻ってきて、みんなが平和で幸せな気持ちになれる。お茶は緑色をしているが、それは自然環境の色といってもよく、茶碗いっぱいのお茶はじつは小さな宇宙だと私は考えている。私は〈みんな一緒だよ〉という言葉が大好きだ。一服のお茶をたてる人、受けていただく人、そして、宇宙に浮かぶこの美しい地球という惑星に生きるすべての生き物、みんな一緒です、世界中が仲良く平和に暮らしましょう。憲法改正が叫ばれていますが、戦後60数年、日本ほど平和の恩恵を受けてきた国はありません。国連でも米国議会でもお茶会を催しましたが、一服のお茶に込めた平和への願いは諸外国のみなさんにも通じた」と、ときにユーモアもまじえて諄々と話されました。



千玄室先生の公開授業光景

公開講座をきいて

地球という視点を教わりました

和服姿のある年配の女性「地球という視点で私たちの生活を振り返ろうという大きな、おおらかな考えかたに感動しました」

お互いの価値観を認め合うお茶の心学ぶ

若い女性「小さなエゴや価値観の押し付け合いをするのではなく、おたがいが認め合うというお話に考えさせられました。お茶の心は本来そこにあったんですね」

生き生きと活動的で勇気のある発信に感銘

初老の男性「千玄室先生は有名な人だが、茶道のいわばシンボルの存在とおもっていた。しかし、憲法改正のことや米国のイラク攻撃にも発言されるなど、生き生きとした躍動感と勇気の人であると感心しました」

梅田キャンパスは「高灯軒」 新宿キャンパスは「心田庵」 —高く灯を揚げ、伝統文化・日本文化を照らし導く—

なお、本学の社会人大学院では茶道、生け花、書芸術などの伝統芸術授業に力を入れ、新宿、梅田キャンパスにはそれぞれ茶室があります。

梅田キャンパスの茶室は8階にあり、千玄室先生によって「高灯軒」と命名されました。この名称は大阪住吉浜辺（大阪市住吉区）にあった日本最古の灯台「高灯籠」から由来しています。鎌倉時代に海運業者が献じたものと伝えられ、住吉大社から600メートルほど離れたところにありました。闇夜の船の運行にも方向を見失わないように、とつくり、灯台の役割を果たしていました。ここから眺める入日はとても美しかったそうです。高灯籠は大阪百景に数えられていましたが、戦後、ジェーン台風で壊れ、再建されました。本学の「高灯軒」も八階の高所にあり、伝統文化の拠点として高く灯を揚げ、茶道を通じ広く日本文化の光を人々にてらし、導こう、との願いが込められているわけです。

また、**新宿キャンパスの茶室**も千玄室先生が「心田庵」と名づけられました。農民が田を耕すように、人々の心の田を耕すように、人々の心の田を耕してもらおう、そして人材を育成しようとの思いがこもっています。



梅田キャンパスの茶室と茶室名「高灯軒」



新宿キャンパスの茶室と茶室名「心田庵」

千玄室先生の公開講座の趣旨

日本の国是は「和」

こどもの私に母がつねづね教えてくれたことは「感謝の心」です。朝に夕に、なにごとに感謝しなさい、と口癖のようにいわれました。おたがいの立場、気持ちを察し合い、感謝の気持ちを持つことで、おのずから「和」が生まれましょう。聖徳太子の昔から、日本の国是は「和」。日本国の一番のモットーは平和なのです。第二次世界大戦で私も召集され、若若い戦友たちはつぎつぎ出陣していきました。戦地で私は携帯用の茶セットで彼らひとりひとりに感無量の思いを込めてお茶をたてました。彼等はいま沖繩の海に沈んでいます。

戦後60数年をへて、憲法改正の論議がやかましく出てきていますが、戦争に負けていながら、こんなに平和に落ち着いて生活をしている国はほかにあるでしょうか。そのことの意味を深くかみしめたいとおもいます。

この世界をいま、人間同士の利益やエゴがひしめき、ぶつかり合っています。視野を広く、地球というイメージでこの世界をとらえてはどうでしょうか。無限の宇宙のなかで、この惑星だけ、私たちが住まうことができ、多くの生き物が、植物が、生きることを許される、この美しく優しい奇跡の星にもっともっと感謝してはどうでしょうか。

お茶という小さな宇宙でみんな仲良く肩寄せ合って

さて、あなたがたてる一服のお茶は緑色をしています。緑は山河、自然の色です。一服のお茶はじつは小さな宇宙にほかなりません。どうか相手の方の幸せを願ってお茶をたててください。相手の方の幸せを願う心が、あなたを幸せにします。私は「みんな一緒だよ」という言葉が大好きです。一服のお茶は人間のさまざまな区別、差別、エゴの境界をなくし、お茶とともにみんな一緒になるのです。お茶という小さな宇宙と一体になって静かな平和を愛し、環境を大切にすることを育んでくれるのです。

同じ人間なのに、価値観が違うといっていじめたり、むかついたり、人をあやめたり。そうではなくて、お互いの価値観を認め合うことが大事です。肩を寄せ合って価値観を尊敬しあうこと。

一杯のお茶に込めた平和の願いは世界に通じた

あなたと私、の「と」は対立を意味します。そうではなく、あなたの私、「の」は「和」を意味します。「と」の対立の世界はいらない、「の」の和の世界がいい。それはお茶の心です。国連でも米国の議会でも、私はお茶会を催しました。私は、和の心を込めてお茶をたてました。一服のお茶こそ和を願う日本の心です。外国のみなさんにも、その願いは通じたと確信しています。よくわかってくれました。まさしく「茶道の心は世界平和へ」なのです。



写真集「大阪百景」（福島明博）に紹介された本学の池田理事長の生家。150年以上前に貴重な材木と技法を駆使して建てられ「文化庁登録有形文化財」に指定されている由緒ある建物ですが、軒の上に往時の「高灯籠」の模型が置かれています。大地主で酒と味噌の製造販売をしていた理事長の祖父が明治のはじめにつくり商標登録しました。いまでも見物に訪れる人が絶えません。祖父は病弱な妻のために日本最古の加工味噌をつくりましたが、商品としても好評で天皇家に献上された記録が残っています。現在も「住之江味噌」として喜ばれています。



画集「大阪百景」「おおさか百景いまむかし」（とも野村廣太郎・絵）に描かれた「高灯籠」

環境トータルデザイン



金賞 4年 金石あゆみ



銀賞 4年 光武史郎

銀賞 4年 高澤暁

講評 李 映一 教授

金賞 4年 金石 あゆみ

この作品は、幼稚園の設計である。デザインコンセプトは子供が遊んだあと（痕跡）をもとにプランを組み立てることで空間の面白さと、空間使用の自由さ、そして学校教育に関するデザインのプログラムとのバランスをうまく表現している優れた作品といえる。

銀賞 4年 光武 史郎

「フットボールタワー」と命名されたこの作品は、サッカー場を設計したものである。何よりも海の上に浮かぶ建築が圧倒的な存在感を示している。この作品のデザインコンセプトはサッカー日本代表監督オシム氏の言葉を持ってきてそれをデザインに置き換えているなどユニークな建築である。

銀賞 4年 高澤 暁

海辺に浮かんでいるヨットをイメージさせるこの作品は、結婚式場とホテルをメインとする複合建築である。スケールの大きさと模型の精巧さが人々の足を留めるほど迫力をもっている。

インテリアデザイン



金賞 1年 辻美喜子



銀賞 1年 檜尾 徹



銀賞 1年 大澤新平

金賞 1年 辻 美喜子 「POP HOUSE」

銀賞 1年 大澤 新平 「ゲスネリア」

銀賞 1年 檜尾 徹 「ピロティの家」

講評 加藤 力 教授

インテリアデザインコースは平成18年度から新設されたコースである。インテリアデザインに必要な要素は「設計技術」、「感性」、それに「マネージメント能力」の3つである。

1年生の段階では徹底して基礎技術に教育の重点を置く。ここにあげた1年生の住宅作品テーマは、「インテリアから発想する住宅」である。いまだ応用技術や表現力は身についておらず、未熟である。だが、いずれも輝々しく光る「感性の芽」が感じとられ、若さに溢れている。「感性」については、専門教育でもある程度高められ得るが、その後は本人の「自覚と努力」によって大きく左右される。専門知識や技術をしっかりと体得する一方で、自分自身の中に宿る感性をたかめ、創造性を豊かに膨らませ空間表現することが、インテリアデザインなのである。

プロダクトデザイン



金賞 1年 灰掛ひいろ



銀賞 1年 大槻さやか



佳作 1年 平川夕華

課題 「掛け時計のデザイン」

金賞 1年 灰掛 ひいろ

銀賞 1年 大槻 さやか

佳作 1年 平川 夕華

講評 中村 隆一 教授

立体系の建築・インテリア・プロダクトの3コースでは、一年生の全期に亘り立体基礎デザインという演習を行っております。

これは、A.O.入試の学生や、工芸、工業高校出身の学生には、実技面での実力の差やコンプレックスが存在しないとも限りません。そのために、双方のタイプの学生にとって、それぞれ効果のある基礎造形能力を向上させるための訓練に近い形の実技指導であります。

その一端として学年末のある程度実力の揃った時期に製作した「掛け時計」の受賞作品です。それぞれの個性の違いを明確に発揮できるように教育・指導した成果であります。

写真



卒業制作賞 鈴木則子・嶋山美幸



金賞 2年 岩田 綾



銀賞 3年 小川拓也



佳作 1年 田中健作

講評 北田 研索 教授

卒業制作賞 鈴木 則子・嶋山 美幸 「TODAY-S」

ルームシェアをして学生生活を送った二人が、いろんな場所で向かい合って同時に写真を撮る！今まで誰も思いつかなかった大変ユニークな作品です。

1年以上かけて撮影された大量のペア写真は、彼女たち二人の記念写真にとどまらず今の時代のギャル達の思考や生活がしっかり表現されたものになりました。

金賞 2年 岩田 綾 「光の造形」

作者は、以前から影を撮っていました。立体が影になると二次元の機械的な模様になるおもしろみを、今回は白黒ではなくカラーで表現した作品です。

まどめられたアルバムの表紙は、沈む夕陽のイメージを背景に、黒紙の切り絵で自転車とバイクに乗っている人物が構成され、彼女の物作りのセンスも光っています。

銀賞 3年 小川 拓也 「One room」

テレビの画面の光で友人の部屋が明るく照らされていた。それがヒントになり時間の流れを写真に定着させようとしたのがこの作品です。部屋を2つのカットに分けることで、空間の広がりも表現しています。

彼にとってまだまだ深い部分が存在するようで、自分自身が見慣れた物からその内なる部分へと、これからどのような映像をみせてくれるのか楽しみです。

佳作 1年 田中 健作 「AMAGASAKI DEEP INSIDE」

物心ついたときから自分の街だった尼崎、その地元に根付く深く、ある意味では暗い一面を白黒写真で表現しています。

彼にとってまだまだ深い部分が存在するようで、自分自身が見慣れた物からその内なる部分へと、これからどのような映像をみせてくれるのか楽しみです。

マンガ



金賞 4年 藪田 智世 「おうちに帰ろう」

講評 葛佐 博

今風の作風、テーマではないが、少年と老人の交流をほのぼのとセンチメンタルながらキャラクターの人生まで垣間見るストーリー作りに好感を持った。

課題としては公開を目的とした作品、独りよがりではなく読んだひとに何らかの感動を与える作品を目的に制作してもらったが、描きたいものをいかにわかりやすく表現するか、そして期日までに納めることができるグレードを保ったまま完成させることができるかどうか、そのバランスに苦労をする学生が多々あった。

幾ら完成度が高くても最終切までに提出しなければそれは何もできなかったことと同じ、期日までに完成したものが始めて評価を受ける世界。またそれが現在の本人の実力だと思う。

よって、未完成の作品の中には受賞作よりグレードの高くなるであろう作品はあったが、全て対象外とした。

金賞 4年 藪田智世

アニメーション

金賞 1年グループ制作 「BOXES」

監督：奥野 倫史／今中 千晶・佐伯 亮

古川 京子・山脇 友恵

講評 神澤 孝宣

CGアニメーション基礎では、後期制作課題としてグループでのアニメーション制作を行いました。アニメは基本的に共同作業でつくられます。アニメーションコースはまだ1回生のみですが、1回生のうちから共同制作に慣れるということが狙いでした。企画・絵コンテ・原画・動画・着色・編集をそれぞれ役割分担または兼業し、およそ1分のショートアニメとして完成させました。実際、まだ1回生である学生達にとっては、共同制作は色々問題があり、グループによっては予定通りに進行しなかったところもありましたが、全体としましては、それぞれグループごとの特色が見られたと思います。

金賞受賞の「BOXES」は、愛する家庭を守るために防衛隊としての謎の侵略者と戦うお父さんの物語。細かなアニメーションで描かれた、家庭の日常と、侵略者との間で繰り広げられる派手な戦闘シーンが対照的です。物語のオチは練り直した方がよくなると思われましたが、細部にまで拘ってつくっており、作画・編集ともに苦勞のあとが見られ、鑑賞にもたえる勞作だと思えます。



春の造形・優秀作品特集

春の造形展・卒展の優秀作品を紹介します。各学科・コースから原則として学年ごとに一点ずつ、先生の講評や本人のコメント付きです。（なお、学年はいずれも昨年現在です）

美術史・美術理論



卒業制作賞 4年 四元晴美
『寶塔寺本堂金欄巻き』（復元模写）



金賞 3年 河上千恵
『葛飾北斎・全身龍』（原寸模写）

講評 関隆志 教授

今回の卒業制作展は、美術史・美術理論コースにとって記念すべき初参加であった。

1期生の5人は、自分の前に道無きを開拓者の心意気で、後輩に枝折りを残す困難な作業を見事に成し遂げてくれたことを感謝したい。卒業制作作品は、論文に加えて洋画修復、復元、模写と多岐にわたっていたが、中でも四元晴美の『寶塔寺本堂金欄巻き』（復元模写）は、そのスケールの大きさ、仕事の丁寧さにおいて一頭抜き出ている。今後社会人として文化財修復の現場に立つことになるが、人格的にも、技術的にも、その成長が楽しみである。

今年上半期の美術界の話題の一つに、ギメ東洋美術館名品展を機会に里帰りする北斎の「龍図」がある。河上千恵（3年）の『葛飾北斎筆・全身龍』（原寸模写）は、個人蔵の北斎作品の模写であるが、群青を用いた濃く深い色彩と筆の使い分けによる北斎独特の墨絵表現方法を見事に再現している。彼女にとっても大阪市立美術館のギメ展は必見のものであろう。

その他、池尻篤志（2年）の『天井画色彩復元』と下園真蓉（2年）の『欄間彫刻彩色復元』の2点から、二人が順調に力量を伸ばしている事が知られる。特に下園は、今回自分の新しい可能性を発見したのではないだろうか。また、濱村礼を中心に1年生の今後にも期待したい。

洋画

2月下旬に大阪市を美術館で開催された宝塚造形大学展（美術学科）は多くの観客を集め、来館された画廊関係者からも“他大学にはみられない、自由な表現”と好評を得た。4年生は卒業制作展の形で展示された。



卒業制作賞 4年 竹下泰裕

講評 中村 貞夫 教授

卒業制作賞 4年 竹下泰裕
「colors session No.7」

竹下君の受賞は、100点の制作を課題にした日頃のたゆまない研さんの結果から当然である。穏やかな、柔らかい色彩と、行きとどいた構成がうまく溶け合って、詩情豊かな作風を打ち立てた。この作品は代表的なものである。

講評 西田 周司 教授

銀賞 3年 山縣 武 「one more time」

コラージュで制作された大作です。昨年2階のロビーで個展をしてから自分の方向が定まったようです。新聞と教員の顔をコラージュして構成し抽象表現的なペインティングを重ねることで面白い効果をだしています。



銀賞 3年 山縣 武



銀賞 2年 食野 文子

講評 加藤 勝久 教授

銀賞 2年 食野 文子

「金引の滝」

写生をする時の視点の位置の採り方は、同じモチーフが随分と違って見えるので重要です。この絵の作者はモチーフの滝に近付いて斜横からの絞って描いて、岩と水の織りなすドラマを感動的に表現して成功しています。



金賞 1年 熊谷衣里子

講評 中村 貞夫 教授

金賞 1年 熊谷衣里子

「through the eyes of God」

熊谷さんのこの作品は糸をびんと張って、放射線状に配置し、抽象と具象の間を行く表現に成功している。独特の色使いでシュールな持ち味を生かしている。又、変形の画面構成など、常に新しい試みに踏み込んでいる所も注目される。

日本画



卒業制作賞 4年 牧野 菜生



金賞 3年 熊谷 有加



金賞 2年 前田 南奈



銀賞 1年 増田 喜代美

講評 曲子 明良 教授

卒業制作賞 4年 牧野 菜生 「金魚、いろいろ」

金魚を上から見たリズムある構図で、平面的な伝統的日本画表現に現代的なデザイン感覚を織り込んだ習作である。

金賞 3年 熊谷 有加 「微笑みの記憶」

幼い頃の自画像であろうか。色彩感覚の良さと滲みやたらし込みの技法を上手く使い、女性らしい爽やかな作品である。

金賞 2年 前田 南奈 「すべり台」

背景を消し取り、すべり台を象徴的に描いている。この空間表現に日本画の本質を感じさせる。

銀賞 1年 増田 喜代美 「空中遊泳ショー」

イルカの配置が画面に躍動感を出している。胡粉を上手く使った爽やかな色感がイルカショーの雰囲気を感じさせている。

特に、1回生は全員よく頑張っている。今のところ殆ど差はないのでお互い切磋琢磨して成長していく事を期待している。

彫刻



卒業制作賞 4年 中村 享史



金賞 2年 西村 大喜



金賞 1年 福山 真梨子

講評 市川悦也 教授

卒業制作賞 4年 中村 享史 「なぜ我々は存在するのだろうか2」 塑像

「卒業制作」を作家としての巣立ちとして研鑽出来た好例だろう。哲学風の題名からも若さの象徴として好感ももてる。素材研究も表現のための大切な要素であるが、2作目で早くもセメントでの表現方法を把握し始めている。フォルムの追求と平行して今後も様々な素材の研究を続けてほしい。次は金属造造かな？

金賞 3年 井上 豪 「tree in the world」 自由制作 集成材・他

「自由制作」では、表現も素材も全てが作者に委ねられる。与えられた課題作と異なり全てを自分で決定しなければならないのだが、大部分の学生がここで壁にぶつかる。課題制作では苦しみ抜いていたが、ようやく表現したい世界が把握出来たのだと思う。あと1年、大きく飛躍してほしい。

金賞 2年 西村 大喜 ひねり「フォルムの分解による再集成」 集成材

完成度は高いのだが、エスキースでこだわっていた魅力が殆ど活かされて無い。そんな中でも磨き上げる意味は把握できたと思う。興味の持ちにくい課題でも、少しの辛抱でひと回り大きく昇華出来るものだ。次作に期待する。

金賞 1年 福山 真梨子 「ただいま」記憶に残っている一品 木彫

高校通学時に使用していた鞆をモチーフに木彫に表現しました、学校からの帰宅と同時に居間に放り出された通学鞆、躍動感が伝わってくる秀作です。レリーフ状の構成は難しい作業です。台枠（たいひ）を素材に試行錯誤を重ね、模刻の域を脱して彫刻作品としての完成度の高い作品が出来ました。見事！

ファッションデザイン



金賞 4年 菅原 聖子



金賞 3年 尾崎 さやか



金賞 2年 池田 なつき



金賞 1年 坂田 恵美

学生のコメント

金賞 4年 菅原 聖子 「sleek style」 ブランド企画

アンティークカジュアルをブランドコンセプトに、なつかしさと現代を融合したさりげないオシャレを楽しめるスタイルのブランドです。

金賞 3年 尾崎 さやか 「bird of paradise」 イブニングウェア

鳥たちの求愛をイメージし、真っ赤なカラーでマンッシュに表現しました。マーメイドラインのスカートと、タイトなパンツの組み合わせです。

金賞 2年 池田 なつき 「JEWEL」 イブニングウェア

さまざまな白に輝くオーロラのように美しく、くもりのない透明感を、たくさんのビジュースパングルであらわしました。

金賞 1年 坂田 恵美 「火の鳥」 ファッションとマンガのコラボレーション

手塚治虫の「火の鳥」のイメージを神聖な白とかわいらしい印象のバルーンパンツで表現し、たくさんの羽根をトリミングしました。

ビジュアルデザイン&アドタイピング

春の造形展



卒業制作展

講評 山崎 昌久 教授

春の造形展は毎年充実した内容で、今回も高く評価したい。真剣に取り組む創作活動にアイデアの新鮮さと表現方法の相乗効果を感じ取り、見る人に快い感動を与えているように思える。

アドタイピング&グラフィックデザインを学ぶ1年次は、アートに通じる発想の自由性が発揮できるイラストレーションを中心とした絵本の制作と直接デザインに通じるタイポグラフィやグラフィックデザインの内容に素直に対応したすがすがしい作品で大変好感が持てた。また表現方法としてはハンドワークとコンピュータによるデジタルワークの混在が個人で見られ、それぞれの表現効果の習得が行われており、先に繋がる内容として期待できる。中でもイラストレーションの役割を学ぶ絵本の制作は、それに接する人を驚かしたり感心させたりする発想や創意工夫が大変新鮮で、既成の枠を取り払った自由な創造性を大いに評価したい。なお絵本の外部コンペの入賞作品も展示され、その内容に将来性もあり心強い限りである。

2年次に於いてはデザインの役割と意義を理解した上での制作内容で、マーケティングの重要性を認識し市場との連動を強く意識した作品群が中心でデザインの本筋に迫る内容が伴っていることが読みとれた。3年次のマーケティング・コミュニケーション・デザインの授業に繋がるブランド企画作品は、グループ制作による調査から企画、そしてブランドの構築に関わるデザインツールの制作と云う一連の表現とその技法は、学年としては内容もあり、高いレベルで制作されていたことに好評価したい。

3年次は、まず自分たちの作品はその内容に照らし合わせてディスプレイしたいと云う思いを実行したことを大いに評価したい。アートまでに迫る創造力が伴った作品が多く出品され、その迫力作品群は見る人を魅了したと言っても良い。今回も1階に集められた作品群は特に真剣みがあり、アドタイピングを切り口にしたグラフィックデザインや立体を絡ませた作品は、デザインもアートになりうる事を示したもので、大いにアピール出来たのではと考える、さらに実用性からのパッケージデザイン、また、イラストレーションから発想されたキャラクターデザインも同様に高い創造力が見て取れ、企画作品として高く評価したい。実社会に繋がるレベルが確認できたことにも意義深い。

イラストレーション



金賞 2年 池本 佳奈美



金賞 1年 越智 麻理恵

講評 大河 繁 教授

金賞 2年 池本 佳奈美

この作品はイラストレーションの展開を学ぶ授業でカレンダー（6枚綴り）の中で独自のイラストレーションを展開した池本佳奈美さんの作品です。

色々な授業で課題に追われる日々ですが、イラストレーションに対する姿勢が真面目で、どの作品にも手を抜くことなく作品レベルは非常に高いということが金賞の理由です。

今後の成長が楽しみな学生の一人ですが、独自の世界観を創り続けることと、人物の表現を磨くことが今後の課題です。今年は、個展を実現してください。

金賞 1年 越智 麻理恵

タイトルは「とまとりとえ」、作者に制作意図を聞いてみると「私の最期を見る自分、私の好きなトマト、ノウゼンカズラ、あの鮮やかな花の落ちる姿は私の脈を速くし、人の最期を思い起こさせるのです」という返事が帰ってきました。

とても衝撃的な絵画的作品ですが、ストレートに越智麻理恵さんの心象の一部を表現した作品でしょう。時代が描かせる作品かも知れません。1年生の最後としてはとても優れた表現力を持っていますが、いつも寂し気な作品が多いようです。今後の越智麻理恵さんには、目的に応じて描くことよりも独自の世界観を追求表現し続けていくことが大切に思います。